

石川達三『生きてゐる兵隊』考

— 評価の妥当性にふれて —

1

「生きてゐる兵隊」は中央公論社特派員として中支の戦場に赴いた石川達三が、南京城陥落（昭12・12・25）直後の現地に取材し、翌年3月号『中央公論』誌上に発表した作品である。しかし、周知のようにこの雑誌は「生きてゐる兵隊」の掲載により発行直前に発売禁止処分となり、さらに、著者石川他二名が「安寧秩序ヲ紊乱スル」（公判判決）行為として禁錮四か月（執行猶予三年）などの刑事処分を受けた。したがって、一部の読者を除いては、敗戦前にこの作品に触れ得た者はなく、仮りに触れ得ても言及することは合法的世界にあってははばかられる傾向があったようで、板垣直子は「発禁となつたから」「詳しくふれることを遠慮する」（『現代日本の戦争文学』昭18・5 六興商会出版部）と言ひ、石川と親交のあつた矢崎弾にいたつては「『蒼氓』『日蔭の村』もう一つ何かあつたはずだが」（『文芸の日本的形成』昭16・2 山雅房）と皮肉っぽく傍点を付したにとどめてゐる。また、「生きてゐる兵隊」裁判については「軍の鼻息をうかがつた警察や裁判所が空騒ぎしたというのが」（『裁判の真相』（浜野健三郎『評伝 石川達三の世界』昭51・10 文芸春秋社）といった解釈もありはするが、後の従軍作家達に

浅 田 隆

課せられた「第一は、日本軍が負けていることを書いてはならない、第二は、戦争に必然的に伴う罪悪行為に触れてはならない、第三は、敵は憎々しくいやらしく書かねばならない、第四は、作戦の全貌を書いてはならない、第五は、部隊の編成と部隊名を書いてはならない、第六は、軍人の人間としての表現を許さない」といった「戦争文学の六カ条のタブーも、おそらく『生きてゐる兵隊』の出現によって定着した」（平野謙『戦争文学全集』二巻「解説」昭47・2 毎日新聞社）という事情があり、これ以後「もはや権力がわの思想から独立した自由な『文学』の創造が不可能になつたことを法の名において宣言する判決であつた」（安永武人「戦時下の文学人その二」昭41・3 『同志社国文学』）という意味で、看過し得ない事件だつた。しかし、こうした事情を持つ作品であるにしても、管見によると戦前唯一の批評「昭和の十四年間」（『日本文学入門』昭15・8 日本評論社）で宮本百合子は「自身の内面的モティーヴなしに意図の上でだけ作品の世界を支配してゆく創作態度が目立つ」と厳しい批判をあげており、公刊（昭20・12 河出書房）後のことではあるが岩上順一も「反動権力によってかくも愚劣に告発され判決されたからといって、そのことがなにも『生きてゐる兵隊』の非反動性——進歩性を証明するものでもなんでもない」（書

評「生きてゐる兵隊」 昭22・2 『文学会議』と否定的である。

戦後の評価は後述のような作品内容のゆえに褒貶相半ばする。否定評では、右の岩上順一や小田切秀雄「『生きてゐる兵隊』批判」(昭21・3 『新日本文学』)、さらに中野重治の『現代日本小説体系』59巻「解説」(昭27・4 河出書房)におおむね集約し得よう。岩上は「侵略戦争」の「本質をつかむことをどこまでも回避し」「非本質的なものを現象的に記述することによって侵略の本質をおおいかくすに役立つものにすぎない。真のリアリズムとはまるでも逆行したもの」であり「もっと紳士的に侵略戦争を遂行しろと忠告したにすぎない」と言う。小田切は「侵略文学のはしりではなかったであろうか」「『生きてゐる兵隊』をめぐるのは、比類少なく残酷な兵隊と、そこへまで落ちぶれて行くまがいの知識人と、それを知識人一般の現実として肯定しようとする作家と、その作家を特高裁判にかける侵略権力、これである」と言い、中野は作中に描出された日本軍の負性を「作者石川は、これをいいこととしては認めていない」にしても「戦争のなせるわざとして、そのかぎりで放任し肯定するところへ進んでいる」とし、「あらゆる才能、インテリジェンス、人間性を破壊され、一様に戦争道具化されて行く過程を無感動に肯定し認めている。才能とインテリジェンスと人間性ををこのように変化させて行く日本側の戦争そのものの性格には全く目をむけない」と言う。三者三様に、作中に見られる石川の現象的戦争把握といった傾向を批判しているのである。

また、最近の否定論としては都築久義「戦時体制下の文学者」(昭51・6 笠間書院)があり、都築は「『皇軍』内部の腐敗や非人道的残酷・不法を隠蔽した筆法も、そのまま大本営発表に通ずるもの」とし「『支那事変』版大本営発表」にすぎないとする。

こうした否定論に対し、石川が黙っていたわけではなく、小田切・岩

上に対し「時代の認識と反省」(昭22・5 『風雪』、『石川達三作品集』25巻所収 昭49・2 新潮社)で、「示唆するところは誠に貴重なもので」「教えられるところ多大」としながらも「小田切秀雄君のように誰彼をつかまえて戦犯呼ばわりする人と、される方の人と、あまり大した区別は無さそうに思われる。それほど賢明な人たちがなぜ戦争の続いているあいだに」「忠告してはくれなかったのか」と不満のポーズを示し、「侵略戦争であろうと自衛戦争であろうと戦場の様相に変わりはないのだと私は考えた。侵略戦争の本質は政府や参謀本部や軍令部にあったのではなからうか」「そして私は戦場に於ける戦争のみを描いた」と応酬している。しかし看過してならないのは、同じ文中で、

日華事変と太平洋戦争とは、侵略戦争という結果になったようにあるが、だからと言って全く何の取り柄もなかったわけではない。兎にかくあの戦争の結果、アジアには偉大なる革命がもたらされ、革命は今も進行している。そしてアジアは新しく進歩したらしく見える。(中略)日本の戦争は重大な意義をもっていた。私はその意義を重大視するのである。(中略)アジアの大革命という、この事を考えなくてはなるまいと私は思う。

と記していることである。と言うのは、後日、広島に原爆を投下したルーズベルト大統領の夫人が来日した折の「原爆を使わなければ、戦争はさらに永引いたに違いない。そしてさらに多くの犠牲者を出したであろう。原爆は、犠牲者を少なくして戦争を早く終結させる為に必要なであったのだ」との発言に対し、「頬がはてるような怒りを感じた」「大義名分というものはしばしば権力の強い側の自己弁護と同じものになるものようだ」と「心の中の戦争」(『人間の愛と自由』昭50・5 新潮文庫)で激しく批判している。すでに明らかかなように、ルーズベルト夫人の発言の中に強者の論理を感じ激怒した石川が、実は「アジア

の大革命」に「日本の戦争」の「重大な意義」をすりかえようとしたわけで、彼もまた強者の論理を行使しているのである。

このような、強者の論理を無自覚に行使する石川の心の中にこそ、我々は戦争への萌芽を読み取るべきであらう。都築は、石川が敗戦直後に作品を公刊したことについて「鮮烈だった彼の戦時下の活躍を一切免罪し、戦後、戦犯の仮指定を受けながら、その汚名を消滅させる最大の武器となった」という石川個人に対する意義以外認めていないが、これもまた、一応納得のいくところである。

ところで、右のような否定評の反面には西村孝次の「ヒューマニスティックな、健康な常識と社会正義の感覚から」「『表現の自由』の限界ぎりぎりまで抵抗していた」(『現代日本文学全集』77巻「解説」 昭48・1 筑摩書房)という肯定論をはじめ、荒正人(『日本の文学』56巻「解説」昭41・3 中央公論社)や山本健吉(『現代日本文学全集』86巻「解説」昭36・5 講談社)・中野好夫(『人と文学』『日本文学全集』48巻 昭45・11 筑摩書房)・安永武人(既出)らの肯定評や条件付き肯定がある。荒は「反戦文学でもないし、便乗文学でもない。強いていえば、石川達三流の反抗文学」であり、「その反抗は玉碎主義ではなく、互全主義である」と言う。また安永は「基本的にかれが否定すべきものとしてとらえた状況が否定の対象としてうかびあがってこないで、むしろ状況埋没の印象をあたえ」「題材選択においてはたらく否定の思想による現実とのたたかいが、作品のなかにたたかいて昇華・結実しない結果」「根本的な否定の意図がよみすぎられ、むしろまったく逆の意味をもつものとしてうけとられる弱点がひそんでいる」と言う。

以上の否定・肯定論を比較するときまず気付くのは、否定的評価者の歯切れの良さである。しかし筆者の場合、これら両様の評価の二々に共感し得るものがあり、複雑な混乱に陥らざるを得ない。既述のよ

うに、石川には強者の論理があり、この部分には一種の嫌悪を感じながら、「この作品が結果的に戦争協力に役立たなかったというのは、作者の子測しなかった怪我の功名」(分銅著作「戦争文学の周辺」 昭46 『国文学』)であったかも知れないにしても、「読者をして、かれ(石川・注浅田)の意図をこえて、戦争そのものの本質にまで想到させるリアリティをもっている」(安永)のも確かであり、「戦争協力」といった石川の意図にかかわる側面のみによって作品を塗り込めてしまうのは、少々妥当性を欠いているように思える。

2

「石川の意図」と言ったが、「経験的小説論」(『石川達三作品集』25巻 昭49・2 新潮社)には興味深い記述が見える。彼は二十歳前半期に「『抵抗の文学』という本」に感銘をうけ「抵抗こそ文学の一つの要素」という方向に「作家としての心の窓が開かれた」と言う。また、戦時下の言論統制下の日本の新聞について「正確な報道の義務も正当な批判の責任も、また言論自由の原則」も捨て、「軍部の自己宣伝的な戦争情報を掲載」する「醜い走狗となり果て」たことへの「私の憤り」について記している。このことについては「ロマンの残党」(昭22・4 『芸術』)に、出征した宮木草雄(八木久雄)からの戦場通信に触れ、大本営発表や新聞報道の欺瞞性、聖戦神兵観の虚偽性を悟り、「戦争とは何か。それを究明したい欲望」を感じ始めたことになっている。おそらく「新聞記事とはまるで違った本当の戦争の姿を見、それを正確に日本民衆に伝えたいという気持から」(『経験的小説論』特派記者を志願したというのも、石川流の正義感として、当然だったろう。また国家と個人の関係について「作家は個人を守りその自由と尊厳のために闘うが、国家権力は「常に人民に」国家への奉仕を要求する。

だから作家は国家に対して「批判的・野党的」たらざるを得ないというのが作家たる自分の良心なのだ。一方国家権力は、批判を受けながらもその批判権を認めるといふのが国家の良心でなければならぬと言ふ。このような記述、特に国家と個人の関係について、やや図式的であるにせよ、それは妥当なものである。

「生きてゐる兵隊」とは、右のような作家精神を持つ石川によって書かれたわけだが、直接の執筆意図は具体的にはどのようなものだったか。公判関係資料等によるとつぎのようになる。

国民ハ出征兵士ヲ神様ノ様ニ思ヒ我軍カ占領シタ土地ハ忽チニシテ楽土カ建設サレ支那民衆モ之ニ協力シテ居ルカ如ク考ヘテ居ルカ戦争ト云フモノハ左様ナモノテ無ク戦争ト謂フモノノ真実ヲ国民ニ知ラセル事カ真ニ国民ヲシテ非常時ヲ認識セシメ此ノ時局ニ対シテ確乎タル態度ヲ採ラシムル為メニモ本当ニ必要タト信シ

(第一審公判調書)

「インテリ出ノ兵ハドウナルカ?……」ト云フ目下ノ問題ヲ考ヘテ見様トモ思ツタ

(審視庁聴取書)

あるがままの戦争の姿を知らせることによって、勝利に倣った戦後の人々に大きな反省を求めようというつもり

(「誌」初版『生きてゐる兵隊』巻頭)

戦争という極限状況のなかで、人間というものがどうなっているか、平時における人間の道徳や智慧や正義感、エゴイズムや愛や恐怖が、戦場ではどんな姿になって生きているか (経験的小説論)

以上を要約すると、(1)戦地の実状をつぶさに描写することによって、

銃後に喧伝され美化された兵士像や聖戦観を突き崩すこと、(2)さらに突き崩すことによって反戦・厭戦を意図するのではなく、真実を知った上で戦争を支援する方向に国民意識を再編すること、(3)また、戦場の極限状況下に知識人達はどのように対応し、どのように生きているか、を考えようとしたということになる。

石川は「私が知りたいのは嘘もかくしも無い、不道徳と残虐と凶暴さとに満ちた戦場の裸の姿である。」「私が一番知りたかったのは戦略、戦術などということではなく、戦場に於ける人間の姿だった」「それを探り出すためには下級の下士官兵と接触しなくてはならないと思つて」(経験的小説論) それを実践してもいる。この取材態度の是非はともかく、原体験以前に八木久雄の戦場からの情報があり、執筆意図に則した計画的取材といった傾向が感じられる。石川自身もこのことについて「あまりに職業的であり、不純」(同前)とは言っているが、問題はそのようなところにあるのでなく、内地で企てた構想・意図が実際の体験によっていかに変容したか、否、寧ろ、当初の意図が体験の意味の追及を深化させ、そのことの逆作用として意図の深化がもたらされたか否かということである。さきの要約に即するならば(結論を急ぐようだが)(1)については、当初の意図がそのまま実現しており、後述のように、「支那事変」版大本営発表」といった側面を持ちながらも、聖戦、神兵観を崩壊せしめている。(2)については、ある意味で、戦地での負性の感動体験が有効に組み込まれ、それなりに成功したようである。問題は(3)だが、後述のように知識人や戦場についての(逆に非知識人や平時についての)石川の固定観念のゆえに、宮本が言うような「意図の上でだけ作品の世界を支配してゆく創作態度」に墮しているという傾向は否めない。

とはいえ、「直接見るかぎりのものは、そのままありのままに書い」

(中野好)ており、「現象の背後に侵略戦争の本質を見抜くような歴史観イデオロギーによって裏づけられたものでない」(同前)にせよ、この「ありのまま」の描写が「意図をこえて、戦争そのものの本質にまで想込させる」(安永)内容を含んでいることも無視出来ないのである。

石川は「戦うことの原因も理由もなにひとつ知ってはいない。万歳と叫ぶ理由がわからない。すべてを理解して戦争にとび込んでゆくように見える人々が賢明に思われた」(『結婚の生態』 昭13・11 新潮社)と、発禁事件直後に記しており、戦争自体を肯定するところに立っていないことが感じられる。ところが、公判では「惨忍な場面ヲ書クニ当ツテソレガ単ナル惨忍ニ終ルベキデナイト信シ必ス正当ナ理由アツテノ行為デアル様ニ書イタ」(審視庁聴取書)「一塊ノ砂糖ヲ盗ツタ支那人ヲ殺スノハ戦争ノ場合充分ニ殺スタケノ理由カアルト認メテ書イタ」(公判調書)とも陳述しているように、軍の持つ強引な強者の論理を必ずしも否定的に扱っていないことも確かである。

実は私にとつての複雑な混乱はこのような部分に起因するのだが、石川は戦争そのものに対する判断を保留し、戦争の本質に対しても自覚的な関心を示さず(戦争という状況への関心は強い)、その上で国民に戦争協力を訴えようとしているかに見えるのである。この辺りに「憂国の士」(都築)石川の姿があり、「びったり現在と、そして現在の半歩前に即して、はるか未来に進みすぎることなければ、古すぎることもない」「既成道徳をくつがえすかに見えて、結局は素朴な正義観にもとづく小市民道徳を正面切って逆撫でしない」(中野好)石川文学の真骨頂があるのかも知れない。

石川は前引「誌」の他の部分で「国家社会に対する私の良心を擁護しなければならなかった」「この作品によって刑罰を受けるなどとは予想もし得なかった」と記している。ここで言う「私の良心」が、さ

きにも述べたように戦争の是非や本質についての認識に立っての何かの主張を意味するのではなく、まさに「経験的小説論」中のやや図式的な国家と個人の関係認識を紹介したが、作家は国家に対し批判的、野党的態度を保持することが「良心」ということになる。つまり、そこに予想されるものは、反体制的言動をも可能にするラジカルな良心ではなく、言わば体制内での政策批判ということになる(これを私は否定的なものとして評価したくない)。したがって、山本健吉が言うように「反戦的とは、当時としては反社会的・反市民的なのであり、市民的な責任感を自分の良心としている氏に取って」「秩序をみだすような行為を許すこと」ができず、そうした秩序内の思考の結果、「戦場において兵たちが、如何にして狂気のように非人間的な残虐行為に駆られて行くかが、精力的な筆致で書かれ」「兵隊たちの行為に対する弁護の書」になってしまったということも当然なのである。

まさに、戦場の真相を知った上で国民意識を再編成しようとする執筆者意図は、戦地での負性の感動体験によって成功していると述べたが、自己が属する秩序への問いかけを持たないままに「人馬の屍体が霜に掩われている姿を到るところに見、人気なき戦場の荒廃の姿に心打られた。首都南京は難民区をのぞいては、無人の都市であった」(経験的小説論という戦地の実況を直接見聞するとき、「戦うことの原因も理由もなにひとつ知っていない」石川に、国民意識を戦争支援の方向に再編しなければならぬといった実感を強化させたとしても不思議はない。

戦場にあつて兵士達は「狂気のように非人間的な残虐行為に駆られて行く」(山本)。それは戦場と不可分の事態であると石川が考えたとするれば、「戦争が日本の国内でなかったことを心から有難く思う」倉田少尉や「戦争はむやみにやっちゃあかんが、やるからにはもう何ん

としても勝たにやならんです。孫子の代まで借金をしても勝たにやならんです」と言う一小隊長のことばも、石川の実感であったろうと思われる。そして、石川が描いてみせた無道徳・無秩序な戦場における残酷非道を国内に持ち込まない唯一の方法こそ、戦場の美化とは逆な醜悪な戦場の真相を国民に知らせ、石川が体験した戦場に対する負性の感動を国民にも追体験させることであつたのだ。

以上作品評価を概観し、つづいて執筆意図の検討を試みてきたが、(3)番目の知識人論にかかわる部分の検討を以下に試みたいと思う。

3

さて、この作品でまず注意を引くのは、中野重治が「あらゆる才能・インテリジェンス・人間性を破壊され、一様に戦争道具化されて行く過程」と評したような、人間がモノとして扱われる傾向についてである。

作品冒頭に「二人の中隊長は戦死し歩兵は兵力の十分の一を失つていた」と見える。高島本部隊(師団)中の西沢大佐が率る歩兵大隊の十分の一が戦死したということで、百名内外の人命が「兵力」の損耗として一括されていることになる。もちろん、当時であつては「兵力」という兵員把握は普通の表現であつたが、この「兵力」という表現に代表されるような、兵士個人を軍という組織構成上の一因子として把握することに對する根本的な問いかけが作中には感じられない。

兵隊達は未明に出発命令が下り、寧晋から行軍、石家荘からは長い軍用列車を乗りつき、さらに大連で乗船、吳淞砲台付近から黄浦江を遡行し敵前上陸する。この間の兵士達の心理が小さな挿話群によつてみごとに描出されている。それは戦争道具(モノ)として運搬されている兵力の内に秘められている人間の情緒(モノ)となり切れ切れていない

部分)の描写でもある。

彼等には寧晋出發以来行く先が知らされておらず、磁石によって確認する列車の進行方向によつて、行く先を想像し、一喜一憂する。「凱旋かも知れない」という期待とは裏腹に、「国境のトーチカがいかに完備したものであるかも度々聞かされている」「ソ満国境」かも知れないという不安。大連到着後民家に分宿した彼等は凱旋を信じ、故郷への土産物を買つたりもする。しかし翌朝、彼等を待っていたのは三日にわたる「敵前上陸の訓練」であつた。そして、訓練を終え新しい戦線に向かう彼等は、軍用船中より「丸窓を開けて遠ざかり行く大連とその辺りの島々を無言のうちに眺め、買つて来た土産ものを波の上に投げ捨てた」。この辺りの表現には、石川の従軍体験の実感の投影が感じられる。彼は従軍時の心境をつぎのように記している。

私は心身ともに疲れていた。死体のある街、廃亡の街のいたましが頭の芯まで沁みるほど強い刺激になつたものであろう。私の弱い神経はやはり平凡な常識的な日常生活をほしがらうになつた。

「ああ、帰ろう」

そういう溜息は失われた平和への熱望ではなからうか。(中略)兵士たちにもつからない場所へ紙入れの中にしまつてある子供を抱いた妻の写真を出してみるほどに私は矢の如き帰心を感じ、そして自由に帰ることのできる自分を兵士たちに対して済まなく思うのであつた。(結婚の生感)

こうした石川の心境を媒介にするとき、組織としての軍に於て兵力としてのモノでしかない彼等の心の底にも「矢の如き帰心」があること——人間としての情緒があることを「土産もの」に象徴し、丸窓から投げ捨てられる「土産もの」に、彼らの諦めと、「帰ることの出来る自分を兵士たちに対して済まなく思う」心境とが封じ込まれている

ことが想像される。そして、この「済まなく思う」石川の心境が、「兵隊たちの行為に対する弁護」の方向に石川を走らせた一要因になっていることを看過すべきではなからう。

兵隊たちの諸々の思いとは無関係に、彼等は「どこの戦線」に向かうのか依然知らされず、さらに「中隊長も大隊長も知らない。聯隊長でさえも、もしかしたら高島師団長自身も知らなかったかも知れない」と、戦場の非情さ、否、軍という組織の非人間性を描出する。船中には「出港後三時間を経過して開封すべし」と朱書きされ」た「上陸すべき地点の軍事機密地図」があるだけなのだ。

軍は組織以外の何ものでもなく、輸送される兵士達は「戦争道具」以上でも以下でもない。しかし彼等の日常は「是命なり是従うべし、何の逡巡も感じはしない」「耐えられないほどに疲労した」兵も「不審番の任務がどんなに重いものかは寝て居ても知っているのぞ」「不審番だノ」と叫ぶと、おうと急にはっきりした声になって起き上る「様は「機械の様に正確で憐れ」なのである。このように見てくると、兵が置かれた非人間的状況と、そうした状況に耐え、雄々しく戦いに立ち向かう雄姿が一応感じられるのだが、純粹にそれらの兵士達の雄姿の受容の方向に読者をして向かわしめない不純な響きを作中に感じざるを得まい。

石川の筆致は既述のような「兵力」式の認識、換言すれば組織構成上の因子としてのモノといった人間認識を十分自覚的に批判し得てはいないものの、無自覚な形で、「兵力」として一括される一人一人の兵士の心情の方向に無関心ではいられないのである。

表面的に読み進むならば、不審番に立ちあがる兵士同様の、所謂戦陣美談に類する挿話が無数に見られる。例えば敵前上陸を目前に船中の「百八十人がみんな明日の戦死を黙々と待機している気持が悲しく

たまらなかつた。ただ一人の兵もそれに向って不平を吐こうとしな
いこの精神の一致が泣くべきことであつた」と記す。しかし、この百
八十人中の一人である近藤が故郷への手紙を書きながら「平尾、手紙
を書かんのかい」と呼びかけると、「書かんノ」「郷里にいるやつ等に
俺の気持なんか分らん」と応える。一見戦陣美談化の方向に流れなが
ら、現象としての従順さの背後になお息づく、人間の姿が、読者の眼
前に浮かぶはずである。他にも聯隊旗手や腹部貫通で瀕死の兵に關す
る挿話、「陛下の御稜威」や聯隊旗の呪力の無批判な描写など、当時
の新聞紙面を飾り、銃後国民の戦意昂揚のために流された美談と変わ
りはなく、このような部分は「生きてゐる兵隊」が「支那事変」版大
本営発表」と都築が言つたような性格を確かに持っているのである。
しかし同時に、非個性・非人間的に組織に埋没するかに見える兵士の
内に、一人一人の悲喜があることを訴えていることは見逃してならな
い。

「経験的小説論」の中に「戦争という極限状況」という表現がある。
この「極限状況」という語だけでは、石川が具体的にどのような戦場
認識を持っていたか定かでない。しかし石川には戦場・戦争を国内の
日常性から遮断された特殊な場——異空間とする認識があつたようだ。
そして、その特殊性の最たるものこそ人間のモノ化だと言いたげであ
る。しかし既述のように石川は、この人間がモノ化するということを
肯定してはいないものの、そのことが持つ問題性を追及してはいない。
「戦場に於ける個人の姿」「戦争という極限状況のなかで、人間とい
うものがどうなっているか、平時に於ける人間の道徳や知恵や正義感、
エゴイズムや愛や恐怖が戦場ではどんな姿になって生きているか」と
いう意図に即し、「そのままありのままに書いた」のであろう。

「如何なる場合にも」「自分を反秩序的な立場に追いこむことはない」石川は、既述のごとく、焼土と化した中国の戦場を実見し、国家存亡の危機を痛感し、戦争そのものの可否や日本の立場の是非を越え、仮りに「防禦的戦争であっても防禦の目的を達成するためには侵略しなければならぬ」（時代の認識と反省）という方向に、あるいはまた国家の擁護・戦意の鼓舞の方向に突き抜けて行ったにちがいない。しかしそうした理念とは別に、戦場に耐えつつあえぐ一人一人の兵士の心情を払拭しきれず、そこに、美談を描きながら美談化しきれない要素が混入する因があった。熱に浮かされた当代の読者の何割かには、美談が美談として、そのまま拾い読みされる可能性もあったろうが、今日の読者には、美談が意図的に否定的に処理されていないにもかかわらず、随所に、状況への批判的享受を可能にする要素が感じられるのである。

4

既述のように知識人論はこの作品を支える重要な柱の一つである。ところで、中野好夫によると「蒼氓」（昭10・4 『星座』）は当初、ゾラに傾倒した石川がルーゴン・マッカール叢書に似せ「時代を横に切った社会史」としての「蒼氓叢書」という構想のもとに着手されたらしいが、ゾラの実験的手法を摂取した石川が、「生きてゐる兵隊」において、自己のテーマをいかに対象世界に解き放ったかは大きな問題である。この点についての宮本の批判はさきに紹介したが「インテリ出ノ兵へ」「戦争という極限状況のなかで」「ドウナルカ」についての石川の側に予定調和的な強引さがなかったか否か検討してみたい。

主要登場人物は近藤一等兵・平尾一等兵・倉田少尉であり、これら三人の知識人に対立する形象として笠原伍長・片山玄澄従軍僧が配さ

れている。紙幅の関係で、ここでは倉田少尉に限定して検討する。倉田は元小学校教員で繊細な感情の持ち主であり、笠原同様に勇敢ではあるが、感傷的な温和さを内に秘めており、この繊細な感情と感傷的な温和さのゆえに、凄惨な戦場において「死ぬまで続く不安」と「焦立たしい落ちつかない気持ち」に領され、この不安や焦立ちからの自己解放として「激しい戦争」を求め、「死を覚悟して働くというよりも何でもいから早く死にたい」と思うようになる。

笠原は作中最重要人物と思われるが、彼は一向学問がなく、凄惨な殺戮にも動揺せず「戦場へ来るまえから戦争に適した青年」であり「実に見事な兵士」だが「上官の指令なしに自由行動をとる場合にはどんな乱暴をやるかわからない」という無軌道性を持つ。

そして石川は知識人達について「永い戦場生活のあいだには次第に笠原のような性格になって行くようでもあったし、ならずには居られないものでもあった」と予測する。これが石川にとっての主題の展開であるらしいが、小田切がとくに指摘したように、笠原的でない非知識人や笠原化しない知識人の存在が顧慮されていないのは大きな問題を残す。

ところで倉田は戦場にあっても「丹念に」日記をつけ続けている。それは「再びこの頁を開いて見ること」もないような「無意味なこと」なのだが「自分の死ぬまでのことを他人に知って貰えないというのは彼にとって淋し過ぎる」ゆえに、自分の存在証明として記す。つまり、軍に属する兵力モノとして死なねばならないことへの倉田なりの抵抗であった。しかし、単に兵力の損耗として自己の死が扱われることへの抗いの行為は、自己の生死にこだわらないような「一つはめをはずした精神までは行き切れ」ていないということであり、その結果、死に対する恐怖からの解放を自らの死に求めようとする不安や

焦立ちに陥没するのである。

こうした彼は常塾包囲戦で中隊長を失ったことを「転機」に「ひとつ桁のはずれた」状態に進む。それは「ある種の実感の飛躍であり、また陥落であった。あるいは自己の崩壊を本能的に避けるところから一種の適応としての感性の鈍磨であったかも知れない」と説明する。しかし、彼の心が到達しつつある「軽さ」「明るさ」は「穿撃すれば底ふかく暗黒なものを含んでいるようでもあったけれども」「いま彼は絶対にその穿撃を自己に加えることを欲」せず、判断反省思考を中断した状態に自己を保留しておこうとした。このように石川は笠原的人格に変貌しつつある倉田を無批判に肯定しているのではなく、「一種の自由感であり無道德感」と限定しつつ描出している。

母を失って「涕泣嗚咽」する声に耐えきれず姑娘を殺してしまった平尾の行為について、笠原は「勿体ねえことをしやがる」と一言呟くだけだが、この笠原の「神経の図太さ」が倉田の「苦しさを救」ったともいう。笠原にとつて殺戮の対象は人間でなく、性欲の対象としてのモノとしてより考えられていないようだが、このことは逆に、人間の存在や生命をこのように割りきってしまう笠原自身が、すでに非人間的的存在(モノ)でしかないことを意味しており、倉田もまた、このような笠原を「心の底から見事なもの」と羨望するところまで、自己を負性に向けて変革したことを示すのである。

このような倉田は南京城の攻防戦後、敵の死体によって笠原がしつらえたベッドに何の抵抗感もなく眠ることができるところまで変貌する。そして、変貌を遂げた後の倉田の心境を「落ちついて柔らかく慈悲ぶかく」「ひろがりやと安定を感じていた」と説明した後、

結局彼は自分の行為について自信をもつことが出来たのでもあった。一人の軍人として、一人の国民として、重い義務を負うて行動

する場合の一つはめをはずした心の状態を身につけることができたのである。

とも言う。しかし、今日の読者には、この手前勝手な強引な説明や解釈を納得することは出来まい。否、当代の読者の中にもおそらく本書の部分では納得しない者があり得たに違いない。

一般に石川は内地から一定の構想を携帯して現地入りし、構想にふさわしい細部を取材したにすぎないとする批評がなされている。しかしそうばかりとも言えないのではないか。むしろ凄惨な殺戮・掠奪・凌辱・放火といった現地の虚無世界をつぶさに見てしまった彼は、「自分を反秩序的な立場に追いこむ」(山本)方向においてではなく、「悲しく矛盾に充ちた日本の国と日本人」(同前)の現実にか自己の論理の世界からつじつまを合わせ、何よりも自己に向けて納得させようとしたのが「生きてある兵隊」だったのではないか。「フローベール流の言い方をすれば、『生きてある兵隊』の中に出て来る若い将校や兵士は(私)だった」(経験的小説論)と記しているのも奇矯の言ではなからう。

小田切の「彼自身の感受性や知的教養が実際にはどのようなものか過ぎなかつたかをむき出すこととなった」という批判も、あの戦時下状況をそれなりに戦いつつ生きてきた小田切によってなされたものであるゆえに説得力がある。否、寧ろ、小田切の批判こそ最も正当性を持っていると思う。しかしながら、戦時下に生きてきた民衆の一つの姿、誤謬に満ちた現実には生きざるあえぎが感じられることのゆえに、全否定的な評価は慎みたいと思う(人情主義・日本型ファシズムといった声を自己内部に感じながら)。

5

石川が試みた戦場における知識人の追及は、結局のところ非知識人笠原への同化ということであった。では、笠原はどのような形象として登場しているのだろうか。

聯隊本部にあてられた民家に放火した青年（民家は青年のもの）の首を軍刀で叩き切る人物としてまず登場する。彼は「にやりと意味深く笑つて町はずれのクリークの畔まで青年をつれて行く。青年は「彼に向つて手を合わせて拝みはじめた」が「拜まれることには笠原は馴れていた」ため、何の心の動揺も感じないまま斬首する。ばかりでなく「さっきの備、殺つたのか」と問われるまで忘れていた程に「彼としては珍しくない事件」なのだ。また彼は「左の腿の上に右足をのせたまま、またずると刀を抜き、足の「こわばった皮を削りはじめ」もするが、「充分に拭かれていない刀には何個所も刃こぼれがあり多少赤みさえも残っていて、脂肪の濁りで刀身は鉛のように光がなくなっていた」とある。この辺りの笠原から、日常的な嗜虐性や類魔的な雰囲気を感じることは容易である。

先述の敵前上陸の訓練後、いよいよ軍用船に乗船し夜半の黄浦江を遡行する「誰も眠れなかった」船中で彼は「ひとり刀を抱いたまま艀を立てて眠っていた」。この図太さは自己のモノ化に抗いつつやつと倉田がたどりついた「感受性の鈍磨」の状況でもあるが、この笠原についても石川は、かなりのことばによって輪郭を浮かべている。しかしながら、作品の中心課題の一つが知識人論であり、知識人が笠原化せざるを得ない戦場の特異性という構図が作品を貫いている以上、知識人の彼岸としての笠原の形象こそ作中で最も重要な位置を占めているはずであるにもかかわらず、石川は笠原について十分な検討を怠

っているようにも思われる。とともに、読者もまた変貌する知識人に対する関心に比べ、笠原には嫌悪感を感じるばかりで十分な検討を加えてこなかったように思われる。

笠原の形象を要約すると、「勇敢」で「忠実」な「軍の要求している人物」であり彼の人格は「激戦」「殺戮」に「ゆるがない心の安定」を持ち、「戦友に対するほとんど本能的な愛情」を持つが「戦場に役立たない」「鋭敏な感受性も自己批判的教養」も持たず「戦場に來るまえから戦争に適した青年」である。そんな彼は「一日の戦闘が終つて一日の平和が來ると彼は元の自分に返つて乱暴と朴直とのあるがままな生き方」をする。「戦場における彼の勇敢さはその裏をかえせば直ちに乱暴にも変化」するのである。そしてこのような人格について石川は「彼は農家の次男で一向に学問はなかつたが、それだけに理屈なしにこういう境遇に腰を据えて揺がない心をもつていた」と説明する。「それだけに」が学問のないことをか農民であることを指すのか定かでないが、農民であり無学であることの必然的帰結としての人格といった設定であり、触れることが出来なかつたが知識人達の感性の三つのタイプを教員・新聞人・医師というように職業に仮託していることもあわせ、どうも説得力に欠ける部分である。笠原について言えば、非知識人、農民の属性といった認識にも石川流の固定観念が見うけられるのだが、ここに大きな問題が伏在している。ここには無知・農民の属性としての人格、具体的には「戦場に來るまえから戦争に適した」「戦場における」「勇敢さはその裏をかえせば直ちに乱暴にも変化」するという点である。

しかしこの問題に触れる前に、作中に描かれた軍の論理——強者の論理について少し見ておきたい。

6

作品の随所に戦争遂行者側の強引な論理（大義名分）が無批判に挿入されていることに戸惑いを感じる。例えば南京を包囲した日本軍が南京防衛司令官に宛てた「投降勧告状」について「情理を以て南京の東亜文化を破壊するに忍びず敢て勧告する」という前文が添えられてあった」と説明する。まさに強者の傲慢な論理である。あるいは倉田少尉の日記の「当市平穩ニ帰ス」という記述にしても、激戦後の石家荘には日章旗が翻めいており、そうした街中を「明朗北支建設のために正義日本を住民に認識させるために、彼等に安住の天地を与えるために」私服の宣撫班が戦後工作に歩きまわるといった部分にしても、石川はこうした日本軍の姿を殆んど無批判に、現地の実況として描写しているのである。これが当時の言論弾圧に対する免罪符の役割りを果たすことを期待した意識的挿入であったかどうか。しかし、このような強引な強者の論理が、前後の非戦闘員殺戮場面などの間に挿入されるとき、かえって強者の論理が宙に浮いてしまうことは確かであり、聖戦観への挑戦という意図的構成が感じられることは確かである。

右のような強者の論理は決して軍という組織を基盤として抽象的に見られるだけではなく、兵士の行動によって具体的・現実的に見られるものもある。例えば中国人農婦の水牛を掠奪（徴発）した場面では「兵たちは良い気持ちであった。無限の富がこの大陸にある。そしてそれは取るがままだ。このあたりの住民たちの所有権と私有財産とは野性の果実のように兵隊の欲するままに開放されはじめた」とさも痛快事であるかのごとく記されている。また「進軍の早いしかも奥地に向っている軍に対しては兵糧は到底輸送し切れなかったしその費用も大変なものであったから、前線部隊は多く現地徴発主義で兵をやしなってい

た」と同時に、この「現地徴発主義」は具体的には兵士個人によって私的掠奪や凌辱という形で実践されているのである。そして、この辺りの兵の心理について「彼等は一人一人が帝王のように暴君のように誇らかな我儘な気持ちになっていた」「自分より強いものは世界中に居ないような気持であった。いうまでもなく、このような感情の上には道徳も反省も人情も一切がその力を失っていた」と説明する。このような強者の論理を殊更に描出した意図が奈辺にあったか把握しにくいのはあるが、戦場における「道徳・反省・人情」等々の追及が本来の執筆意図の内に含まれていたことを思えば、「基本的にかれが否定すべきものとしてとらえた状況が否定の対象としてうかびあがってこないで、むしろ状況埋没の印象をあたえる」（安水）という石川の手法上のまずさということになるのかも知れない。しかし、石川の意図がどうであれ、軍と個人の関係が明らかに浮き彫りされていることは確かである。それは、エピソードの近藤一等兵の不安のうちに、さらに明瞭に見てとることが出来る。

現地（陥落直後の南京）に來た日本人芸者に傷を負わせ、憲兵隊に拘留された近藤は、所属部隊出發後に放免され原隊に復帰すべくただ一人南京市内を走る。

このときほど彼は心からの淋しさを感じたことはなかった。部隊は彼一人の居ると居ないと全く無関心で進んでいる。そして彼は部隊をはなれてまで何の価値もなく何の力もないのだ。彼は心の底から自信を失い誇りを失って、溺れた者のようにただひた向きに原隊に追いつこうとあせり、走った。部隊と一緒に行く、どこまでもついて行く、それより他に彼は何事も考えることはできなかった。おそらくこの部分に見える近藤の心理は兵士に共通するもので、笠原が「上官の指令なしに自由行動をとる場合にはどんな乱暴をやるかわ

からない」といった戦場における彼の「勇敢さはその裏をかえせばどんなな乱暴さにも変化」する傾向も、実は中国民衆に対する強者としての軍に庇護されたもので、近藤の不安と表裏の関係にあること、さらに、戦場での勇敢さや私人としての乱暴さは同質のもので、日本の戦争は正義（国際・社会）などとは無関係な力の論理に支えられたものにすぎないことを見せてくれる。

さらに作品のポリニウムからすれば量的・質的に弱いのではあるが、「元来武力闘争は経済闘争の行き詰まりを打開する目的であった」とし、占領後の南京に流入する日本商人達の活動についても「武力闘争は早くも経済闘争に変化しつつあった」「戦争の終結を待たずに今ふたたび経済闘争は有利な戦いを開始した」とも記している。

戦場における兵士の追及を意図した作品の中にこれらの部分が突如挿入されることはある意味で違和感を与えはするが、全十章からなる作品の九章十章に国際経済関係や近藤の不安を描き込んだことは、あたかも中国との経済闘争の帰結であるかの印象を与える点気になるにしても、既述のような「明朗北支建設の為に」等々の聖戦観が全く空洞化し、単なる力の支配原理に支えられた強者の論理にすぎないことを暴露していることも確かである。

そしてさらに重視したいのは、笠原を典型とする兵士達の乱暴、特に知識人達の笠原化はモノ化することであるととも強者の論理を容認し、力の支配原理の中に自己を組み込んで行くことでもあったという点である。となれば、石川は、平和な社会における知識人像として、人間性や、力の原理とは別な例えば正義といったものを想定し、そうしたものを窒息させる異空間としての戦場認識を持ちながら、戦場を支配する力の原理・強者の論理といったものが単に戦場に限定されたものでなく、日常的な平和な国家の経済原理に内包されているもので

あること、そして、強者の論理が最高に顕在化する戦場に「来る前から戦争に適した」生活が、平時の国家（社会）内に隠然と存在し得ていることを描いてしまったことになる。

石川の執筆意図には多くの否定的な側面があり、作中にも容認し得ない無神経な表現や強者の論理の放任を感じながら、右のような戦争の本質にかかわる問題の描出によって、岩上順一の「かかる事実をいかに判断するか」に重要な問題があるとの批判はあるにせよ、「生きてゐる兵隊」を否定し去ることができないのである。

7

さきに石川のゾラからの影響にふれ「自己のテーマをいかに対象世界に解き放ったか」「石川の側に予定調和的な強引さがなかったか」と述べたが、すでに多くの指摘がなされているように石川は自己の固定観念から解放されてはいない。それは、戦場においては無知な笠原的人格に同化しないでは生きて行けないという断定的な戦場認識に確証されるだろう。一般には知識人・非知識人に対する固定観念とされがちではあるが、日常空間とは切り離された異空間といった戦場認識こそ、笠原的形象とそれへの強引な同化という構想をもたらしたと言える。しかしそうした構想のもとにおける作品創出過程で、石川の異空間という戦場認識が描出した笠原の形象が、逆に石川の構想を突き崩す役割をはたしてしまったのである。戦場は日常性から切り離された異空間でなく、日常性の中に紳士の仮面をかぶって息づく強者の論理が極限まで顕在化する場であることを描きながら、石川自身、戦場・軍隊を異空間とする「俗情」（大西巨人「俗情との結託」昭27・10『新日本文学』）から解き放たれていなかったのである。

紙幅の制限を大幅に越えてしまったので詳述し得ないが、右の「俗情」からの解放を不可能にした最大の原因は、石川こそ紳士の仮面をかぶった強者の論理の行使者であったという点にある。それは拙稿冒頭に紹介した「日本の戦争」の責任を「アジアの大革命」の促進と相殺しようとした点に明らかだが、「生きてゐる兵隊」事件直後の「結婚の生感」の中により明瞭に見てとることができよう。

作中に見える石川の中国人蔑視や第七章の悠久支那の描写の意味、さらに右の大西巨人「俗情との結託」の問題性など、我々に多くの問題を投げかけてくれるという点で、許し難い負性を有しながら、やはり興味深い作品と言わねばならない。

An Interpretation of “Ikite-iru heitai” (A soldier who tried to be human)

Takashi ASADA

Summary

The diversity of the critical judgments passed on “Ikite-iru heitai” comes from its subject matter based on war experience, and the absence of the anti-war design to be put the work. These have raised critical issues around the author’s war guilt. Hence criticisms attempted from ideological standpoints. While we may admit the significance of ideology in a work of art, there can be another viewpoint.

In the present paper, the writer tries to examine the ideology in a literary work, the author’s intention (motif), and an artistic world of its own, which goes beyond the author’s intention.